

エッジのきいた表現を追及する -「循環プロジェクト」の試み

NPO 法人 ダンスボックス [大阪府大阪市]



紙飛行機

新大阪駅にほど近い元勤労者センターの建物の前でたくさんの方々が集まってなにごとかを待っている。そこに車椅子にのった女性が登場。紙飛行機を玄関から建物の奥にむかっただとばすのを合図に、他の出演者も紙飛行機をとばしながらその若者たち(観客)を奥のスペースに誘導していく。導かれた先は、洞窟のような、宇宙のような、ちよつと薄暗く、無機質なようで不思議な居心地のよさをもった空間。出演者たちは、ひとり、あるいは二人で、あるいは数人で、時にコミカル、時に内省的、時に濃厚な関係性を暗示する動きで観客をひきつける。観客もまた観客席に安住することなく、出演者に導かれ、異なる空間を旅しながらパフォーマンスに向き合っていく。

う課題にトライしていった。舞台上にあがったYKさんは公演1カ月前くらいから紙飛行機を折り続け、その数約400機。公演会場で、彼女の飛行機が観客を「日常」から「非日常」へといざなった。

音楽チームも、既成の音楽の概念から自由になることを大切にしていた。3歳(祖母と参加)~60歳代まで、幅広い年齢層の人びとが参加。全員が同時に集まることが難しかったことから、スカンク氏がdBにいる時に、自分の好きな音(楽器による音楽のみならず、ささやき、叫び声、枯葉をビニール袋にいれてかさこそ音をたてたりしたものなども)を持ち寄り、スカンク氏が録音し蓄えていった。それらの音を切りばり・繋いで音楽にしていくプロセスに、まるでセッションのように参加者がかかわったことにより、参加感・一体感が育まれた。そして当日は、それらに加え、4人のメンバーが実にアバンギャルドなピアノや、炸裂するサクソフーンやギターを生演奏を行い、舞台のインパクトを高めた。

「既成概念をこえる」というテーマで最も厳しい側面がたち現れたのはダンスチームである。チーム参加者の年齢層は21歳~60歳代の幅であったが、なかには「健常者のように踊る」イメージから脱却し「自分の表現を創る」ことが難しい人もいた。

ダンス表現は自らの身体をささすことからリアリティがでてくるものである。自らの感覚と精神性が社会とどうかかわるか。自分の生き方そのものをささげださなくては表現としておもしろいものにならない。そのハードルを越えられずに踊れなくなった人もいた。ナビゲーターやアシスタントは、参加者と頻繁なメールのやりとりをしたり、時には稽古場を離れ、参加者の日常のある場所を訪れることなどを通して、コミュニケーションを深め、薄皮をはがすように、その人自身が表出されるよう促してきた。作品全体を貫く心地よい緊張感はそのようなかわりあいから生み出されたものといえる。

継続的な活動を視野に

dBの本拠地である元勤労者センターを上演会場としたのには理由がある。一般の劇場では、車椅子席の数や場所が限定され、柔軟な対応ができないことや、dBでならば舞台美術のつくりこみがじっくりできること。そしてなによりも、ダンサーにとって、身体になじんだ場で公演をうつことができることは大きなメリットである。dBはこれまで、法人事務所と同じところに劇場をもって活動してきたが、常になかが始まり、発展し、育ち、戻ってこられる場、つまり、コミュニケーションの結節点としての拠点をもつことにこだわってきたからである。今回の公演でもリアリティと夢の時間が交錯する空間ができた。

今年の4月の公演でプロジェクトの活動は終息した。しかし、いったん創られた濃密な関係性はかんたんにはほどけない。YKさんは、公演後、A4判の鉛の板をつくってもらい、飛行機を折り続けているという。今回の作品は高い評価を得ており、再演や地方巡演への期待もある。グループ存続の条件を整えるのは簡単ではないが、まずは、エイブル・アート・オンステージ第5期にも応募した。「今回の参加者たちが、今後『ダンサー』として他のグループの作品づくりによばれるなど、いずれは『ダンスでギャラが稼げる』こともめざしていきたい」と大谷氏は考えている。



撮影：阿部綾子



NPO法人 ダンスボックス
エグゼクティブ・ディレクター おおたに いく 大谷 燦さん

障害のある人たちのパフォーマンスの意味には、一方で「アート」にかかわりにくい人びとにアクセスを提供し、表現する喜びや醍醐味を体験できる場をつくっていくこと、もう一方にはプロフェッショナルな表現に昇華させていくことが、いわば車の両輪のようにあると思います。裾野を広げること、エッジになる部分、つまりベストを創り見せていくこと。ダンスボックスは市民社会創造における先端をこれからも追求していきたいと思っています。

「エイブル・アート・オンステージ」参加作品として

そのような刺激的な作品「循環プロジェクト」[『=2』]にあいこーのじょう」を制作したのは、大阪を本拠とするNPO法人ダンスボックス(以下: dB)。コンテンツポラリーダンスを軸に、舞台作品の制作・上演、多様なダンスワークショップ等の開催、地域社会との連携によるイベント等の企画協力、国際的なダンスフェスティバル等への参加、など、ユニークで先端的な活動を重ねてきたグループである。

そのdBが、平成19年~20年にかけて、明治安田生命社会貢献プログラム「エイブル・アート・オンステージ」の第4期参加団体の一つとなった。

この事業は「障害のある人とアーティストなどがコラボレートして、舞台作品をつくる」ことに資金提供するもので、公募による企画案の中から選考されたグループに助成が行われる。受けたグループは、原則として、参加者を公募し、アーティストとともにワークショップなどを積み重ねながら、助成決定からほぼ半年後をめどに舞台作品(ダンス、音楽、演劇、ミックスなど)を公開上演(劇場に限らず、さまざまな環境での上演も含む)するとともに、その顛末を報告することを求められる。

dBの作品づくりは、総合プロデューサーの大谷氏のもと、ナビゲーターとして、第一線で活躍中の振付家である砂連尾理氏、音楽家のスカンク氏、美術家の川井ミカコ氏の3人を迎え、彼らと公募で集まってきた参加者との協働により行われた。公募にあたっては原則、ダンスチームは身体に障害のある人、美術チームは視覚に障害のある人を条件としたが、音楽チームは、障害のあるなしも障害のタイプも問わなかった。同時に、各チームで参加者やナビゲーターのフォロー(コミュニケーションや移動など)をするアシスタントも公募。基本的に、チームごとにワークショップを各6回ほど重ねた後、実際の舞台作品を創る「稽古」に入り、最後に全体でまとめていく、というプロセスで作品づくりがなされた。

既成概念を超える新しい価値の創造

その間「最もきつい思いをしたのは、各チームのナビゲーターだったのではないかと」と大谷氏はいう。ワークショップまでは、参加者の表現の可能性を引き出すことに重きがおかれたが、舞台作品づくりの「稽古」に入る際「プロフェッショナルな舞台」「入場料のとれる作品」にすることを明確にしたことにより、参加者とナビゲーター間に葛藤が生じた。

障害のある人たちの表現活動では、とかく「癒し」や「社会参加」が前面に立ち、「表現者として極める」面が抜けがちである。

「障害のあるなしを『差異』ではなく独自性としてとらえ、幾重にも循環していく関係性をうみだすこと。そのうえで、障害のある人たちだからこそなしえる舞台をめざす」なか、大谷氏たちが共通して求めたものの一つは「既成概念から脱却し新たな価値を創る」ことであった。

たとえば「美術」では、見えない人にとっての美術とはなにか。視覚に頼らずにどのような形で必然性のある舞台美術が成立しえるのか、というチャレンジに立ち向かった。さまざまなアプローチの末、今回は「紙飛行機」を軸に、素材による変化、あるいは、折ることによって身体がどう変わるのか、とい

循環プロジェクト ダンスワークショップ





おおた よしやす
太田好泰さん
 エイブル・アート・ジャパン
 事務局長

障害のある人たちが生み出す芸術は、そのストレートな創造力や発想力によって、多くの人の共感を呼び起こす魅力をもっている。しかしながら、「障害者アート」は長い間余暇活動と一括りにして捉えられてきたことから、クリエイティブな活動として社会的評価が得られているとは言い難い。こうした状況のもとで、いま、障害のある人たちのアートをとおして、多様な価値観を認めあう新たな市民社会の創造に取り組む「エイブル・アート・ムーブメント」が注目されている。ここでは、こうした活動がめざすことや、今後への期待について、エイブル・アート・ジャパンの事務局長・太田好泰さんに伺った。

「エイブル・アート・ムーブメント」とは

「エイブル・アート・ムーブメント(可能性の芸術運動)」は、日本で生まれた新しい活動です。

「エイブル・アート・ムーブメント」には、二つのミッションがあります。一つは、障害のある人たちの表現活動をとおして、彼らのエンパワーメントをすすめることにも、障害のある人に対する社会的イメージを高めること。もう一つは、現代社会のさまざまな価値観、アート観、障害者観、人間観といったものを、障害のある人たちのアートをとおして変えていくことです。

欧米では、障害のある人たちの芸術活動は「アウトサイダー・アート」や「アール・ブリュット」とよばれ、美術のジャンルとして確立されていますが、それらは「美術の専門教育を受けていない人によるアート」であることに価値がおかれ、美術界の中での定義・位置づけでしかありません。

一方、エイブル・アート・ムーブメントは、アートをとおして社会全体の価値観を問い直す市民運動としての意味合いを強くもつものです。

究極的には、障害のあるなしにかかわらず、多様な存在が認められ、誰もの個性が尊重されて、生きづらさを感じない社会になるために社会全体の価値観を変換させるためのムーブメントなのです。

障害のある人のアートをめぐる現状について

エイブル・アート・ムーブメントでは、障害のあるなしや年齢、国籍などにかかわらず、「人間が幸福になる」ということを大切に考えていますが、人間の幸福とは単一なものではないことに気づかせてくれるのが、障害のある人たちの存在であり、彼らが生み出すアートです。作品には、強烈なインパクトのある色づかいや、考えもおよばないような構図、圧倒的なエネルギー感などもつものが多くみられます。あらゆる手法を繰り出して、アートの奥行きや幅の広さを次々に見せてくれるといっても過言ではないでしょう。

それは美術のみならず、あらゆるジャンルの表現において発揮されており、従来のアート、表現活動のイメージをこわす力をもっているのです。

しかし、このようなアートの魅力を日本で普遍化させていく過程には多くの困難や課題があります。

たとえば、日本における「障害者観」、そしてもっと広く考えるならば、「文化観」や「労働観」の画一性をあげることができません。障害のある人たちのアート活動は、いまだに「チャリティ」や「癒し」「社会参加の手段」としての認識にとどまる場合が多く、たとえすばらしい作品が生み出されたとしても「アート」としてきちんと評価されることは稀です。

一方、障害のある人たちのアートの取り組みについてメディアに取り上げられる場合、本来アート欄のある文化面ではなく社会面の話題としてとり扱われることがほとんどです。また、障害のある人たちの生活の目標は、経済的な自立の実現が第一であるされ、芸術活動は、お金を生み出すことができないものとして、就労よりも優先順位が低く、あくまでも「余暇活動」としかとらえられない現状があります。

障害のある人が置かれている社会的地位や状況が「障害のある」状態を創り出してしまっているとさえいえます。

エイブル・アート・ジャパンの取り組み

「エイブル・アート・ジャパン」は、その「エイブル・アート・ムーブメント」の精神を広げ、普及させていく組織として、平成6年に、「日本障害者芸術文化協会」として活動を開始しました。以来、障害のある人が豊かに生きるためのアート活動(美術や舞台芸術などの表現活動)を支援してきました。

活動においては、さまざまなアーティストとのコラボレーションを大切にしています。アーティストは、美術や音楽、ダンスなどの芸術分野で、常に新しい価値を見出したり、多くの人が気づいていないことを表現していますが、そうした才能をもった人々と障害のある人たちが出会うことで、いままでにないものが生まれてくる可能性がたくさんあります。

今回の事例で紹介されている「アトリエ・ポレポレ」の活動や、DANCE BOXの取り組みはその好例といえます。

DANCE BOXは、私たちが現在取り組んでいる「エイブルアート・オンステージ」という舞台芸術のプログラムの参加団体の一つです。これは平成16年から明治安田生命との協働で行っている5年間のプロジェクトで、障害のある人とアーティストが出会うことで生まれる表現の素晴らしさを、音楽やダンス、演劇などの舞台芸術の領域にも広げるというねらいをもって始めたものです。毎年、これまで見たこともないようなユニークな作品が生み出されてきています。

私たちの多くの活動は、企業とのコラボレーションによって実現してきました。たとえば、富士ゼロックスの社員によるボランティア組織「富士ゼロックス端数倶楽部」のバックアップのもとで、障害のある人のアートに関するさまざまなワークショップを2泊3日で行う「エイブル・アート・ワークショップ」も10年間にわたって展開してきました。中間支援組織として、アートの現場に資金を提供したり、障害のある作家の展覧会の開催をバックアップする目的で、平成10年から毎年「エイブル・アート・アワード」という支援プログラムを実施していますが、これも企業からの寄付を原資に行っているものです。

「アトリエ・ポレポレ」の活動は、いわば私たちの原点といってもよい美術系の活動ですが、作品制作にかかわるものだけではなく、視覚障害のある人と美術館に行き、「言葉で絵を見る」鑑賞ツアーも重要な取り組みの一つとなっています。このプログラムは、目の見える人も見えない人も、対等な鑑賞者として、いっしょに絵を觀賞することを信条としていて、「サポートする人・される人」という固定した関係性を持ちこまないという意味で、私たちの姿勢を象徴するプログラムといえます。

さらに、昨年から、財団法人「たんぼの家」(奈良県)、NPO法人「まる」(福岡県)との協働で「エイブルアート・カンパニー」を立ち上げました。障害のあるアーティストを登録し、彼らの作品をデザインとして商業利用できる環境をつくり、著作権使用料を支払うことで仕事の機会を創出するものです。

「エイブル・アート」の今後に向けて

団体の設立以来、10年以上が経過し、この間、アートを主体とした障害者の作業所や施設ができた、障害のある人のアートに特化した美術館も生まれてきたことに、ムーブメントの手応えを感じています。

障害のある人の芸術活動が「アート」として認識され、新しいフェーズに入ってきたと実感される一方で、障害のある人たちのアートを「アウトサイダー・アート」として囲いこみ、「アート」の分野に押しこめてしまいかねない動きへの危惧も感じています。

エイブル・アート・ムーブメントの大事なキーワードの一つは「アートによるソーシャル・インクルージョン」です。ソーシャル・インクルージョンとは「社会的包摂」と訳され、さまざまな違いが尊重され、誰もが排除されない社会を創ることをめざすものです。

物質的な豊かさだけに価値を置くのではなく、一人ひとりのかけがえのない存在が大切にされる社会を創るためには、社会全体の価値観を大きく転換する必要があります。私たちは、とてもユニークな作品を提示してくれる障害のある人たちの作品と存在から、もう一度、社会のさまざまな常識や価値観を見つめ直していきたいと考えています。